

あゆみ通信

VOL. 129

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会)推進員連絡協議会
会長 浪花 博
広報 本持 喜康



東井義雄先生

(東井義雄先生が中学校の校長をしていた時に、学校で卒業生の同級会があり、

そこで一人の青年の発言でみんなが感動した話です)

「僕は中学在学中は勉強は出来ず、分からないことがあっても質問が出来ないダメな生徒でした。勉強が出来ないから、進学が出来ません。個人商店に就職したのですが、そこに僕と同年の娘さんがいるのです。その娘さんが「この靴、磨いといて」と靴磨きを言いつけます。靴くらいは磨きますが、シャツやズロースの洗濯をさせられた時は、男に生まれて同年の娘さんのこんなものまでと思うと、無念で無念で涙があふれて仕方がありませんでした。その時、涙でかすんだまぶたに見えてきたのは、但馬の山奥で、貧乏な百姓をやっている両親の姿でした。それが見えてきたとたん、『これくらいのことにくじけてなるか。ズロースだろうが何だろうが洗わせてくれ、くじけんぞ』という思いが込み上げてきて、微笑みを取り戻すことが出来ました。皆さん、僕の10年先を見てください」と言うのです。さて、人間というものは、こ

の青年のように「僕の10年先を見てください」ということにならないと、光を放つことは出来ないのではないのでしょうか。ダメな人間というのは、素質の悪い人間ということではなくて、スイッチの入らない人間ということではないのでしょうか。私はこのように考えて、子ども達にいつも、次のように呼びかけてきました。

心のスイッチ

人間の目は 不思議な目
見ようという心が無いと
見えても 見えない
人間の耳は 不思議な耳
聞こうと言う心がないと
聞いても 聞こえない
頭だってそうだ
心が眠っていると頭の働きを
してくれない
まるで 電燈のスイッチみたいだ
仕組みはどんなに立派でも
スイッチを入れなければ
光りを放てない

(東井義雄「『モノ』のいのちをいとおしむ心」探究社から)

朋友会と合同研修

第2組の次代を担う青年住職の皆さんと推進員が共に第2組の今後を考える集いです。

率直な意見交換で、楽しい話し合いをしませんか。

日時 9月24日(火)

午後1時30分～

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)

内容 法話と座談

講師 喜左上恵子先生(紹隆寺)

あゆみの会総会は、
12月22日(日)
午後1時30分から、阿倍野区の
法山寺で。

2008年結成(準備会)以来、11年を迎えることになりました。

一緒に聞法活動に参加して下さった皆さんとともに、喜びたいと思います。結成以来、先頭に立ってお世話下さった、お世話人のみなさんの、お陰でもあります。そんな、養成講座や本山研修などの楽しい思い出を話し合う同窓会です。。

人と人との間

先日、関東の従妹から、従兄が、脚立から落ちて、入院したと連絡があった。以前に病気で言語にも半身にも障害があるが、闘病しながら、頑張っていた。僕は見舞いの手紙に、司馬遼太郎の、「人間とはもともとから支え合い、助け合って生きているもの」と言う言葉を紹介して、自分で何でもしようとせずに、人生ここまで来たのだから、これからは、色々な人に助けてもらってゆっくり生きてくださいと、書いて送った。大谷専修学院の前院長であった信國淳先生も「人間は、それぞれ個人であるが、単なる個人として一人で生きることのできるものではなく『人と人との間』というものを持つことで初めて人間として生きることのできる存在である」と書かれていると、釈迦の「縁起法」の内容だと中川皓三郎先生からお聞きした。。聞法第一。我が身に受けとめ回復を願う。(本)

第2組聞法会報告



2019年8月26日(月) 午後2時から、天王寺区の光照寺(墨林浩住職)を会場に、第2組聞法会が、講師に高島沆陽先生(第5組専光寺)をお迎えし、組内の住職や寺族、門徒、推進員28名が参加して開催された。

高島先生は、初めに、蓮如上人が親鸞聖人から相伝された教えを5人の子たちに限って遺された「相伝義書」に長く学んでおられることを述べられ、その一端を話された。

私たちは念仏を称えて、浄土に往生させていただくと考えているかもしれないが、それは方便の教である「観無量寿経」に説かれていることであると。親鸞聖人は、真実の教である「大無量寿経」に説かれているのは、あくまで信心が浄土往生の真因であるとおっしゃっていると。

また、信心は如来が衆生に回向してくださるのであり、そのためには、私たちは聞法していかねばならない等など、詳しく話された。質疑の後、恩徳讃を唱和して解散となった。

(レポート：細川克彦)



高島先生の
法語聞書き
細川 克彦
(佛足寺)



高島先生は、「相伝義書」は正しい伝承ということを大事にしている。覚如上人は、法然上人から親鸞聖人へ、親鸞聖人から如信上人へという相伝を「三代伝持」と言って大事にされた。覚如上人の著作「口伝抄」は如信上人から聞かれたことを伝えいると。同じく覚如上人の著作「改邪鈔」にある「まず能化・所化をたて、自力・他力を対判して、自力をすてて他力に帰し、能化の説をうけて所化は信心を定得するこそ、今師御相承の口伝にはあいかなひはんべれ」を引かれ、覚如上人は自力と他力をはっきり区別しておられると。

「南無阿弥陀仏」を称えて浄土に往生するという教えは、「観無量寿経」の下下品で説かれていることであり、方便の教えである。

親鸞聖人は、まず「聞名」ということ、そして、信心が浄土往生の真因であると教えてくださっている。

凡夫の自力では、真の往生は出来ない。すべて仏の本願力によらねばならないということ。「教行信証」行巻に、曇鸞大師のお言葉「他利と利他と、談ずるに左右あり。もしおのずから仏をして言わば、宜しく利他というべし。おの

これからの行事

●第2組聞法会「共に学ぶ『正信偈』」

日程 9月7日(土) 午後2時
会場 唯専寺(浪速区敷津西)

講師 新田 修巳先生
(平野区 正業寺)

参加費 500円

新田先生、今年、最終の法話です。ご参加ください。

ずから衆生をして言わば、宜しく他利というべし。いま将来に仏力を談ぜんとす、このゆえに利他をもってこれを言う」とあり、「他利」とは衆生が仏に利せられる意で、「利他」は仏が衆生を利する意である。どちらも仏の本願力によることが言われており、衆生に利する力は全くないことを示され、「利」はすべて仏の御仕事である。それゆえ、自力を



捨てて、他力に帰せよと言われていると。現在、「行」も「信」も「証」(往生)も、分からなくなっているのではないか。

「往生って何でしょうか。私の問題、大阪の問題、国の問題、世界の問題、私たちは問題を抱えて聞法しているのでしょうか」と問いかけられた。

最後に、曾我量深先生の言葉「唱名生活ではない、聞法生活。聞かなければこの身に信心を得ることはできない。生活全体が聞名、それが称名である」を引かれ、御法話を終えられた。

(今号も、写真は浪花博さん、レポート、要約は細川克彦さんのご協力編集できたことを感謝します。事務局)